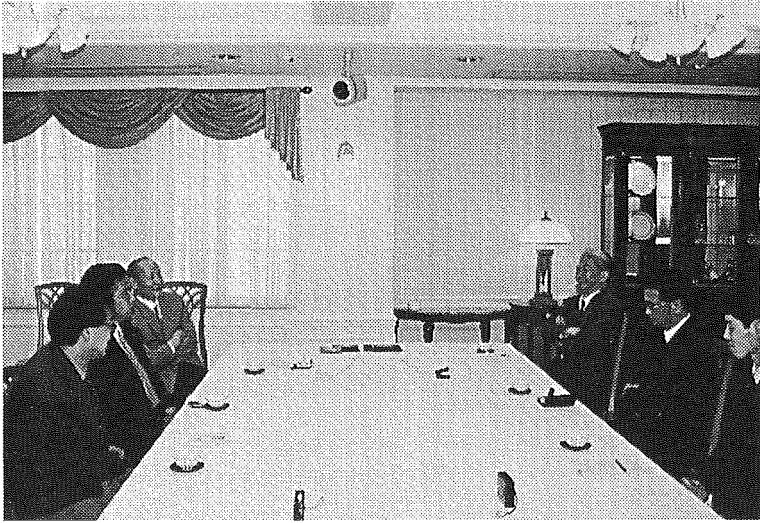


# 神道文化会座談会

## 「近世の神道思想と国学」



安蘇谷正彦（あそや まさひこ）  
昭和十五年生まれ。國學院大學大学院修了。  
專攻、神道学。現在、國學院大學教授。主な  
著書『神道思想の形成』『神道の生死観』。  
武田 秀章（たけだ ひであき）  
昭和二十二年生まれ。國學院大學大学院修了。  
專攻、国学・神道史。現在、國學院大學助教  
授。主な著書『維新时期天皇祭祀の研究』『日  
本型政教関係の誕生』（共著）。  
西岡 和彦（にしおか かずひこ）  
昭和三十八年生まれ。國學院大學大学院修了。  
專攻、神道史・神道思想史。現在、國學院大  
學講師。主な論文「垂加派の日本紀研究」  
「出雲大社に於ける垂加神道と国学の共生」。  
松本 久史（まつもと ひさし）  
昭和四十二年生まれ。國學院大學大学院修了。  
專攻、近世国学・神道史。現在、國學院大學  
日本文化研究所共同研究員。主な論文「荷田  
春満の神代卷解釈形成過程」。「荷田春満の学  
統に関する一考察」。  
松本 丘（まつもと たかし）  
昭和四十三年生まれ。國學院大學大学院修了。  
專攻、近世神道史。現在、神社本庁録事・神  
道文化会事務局員。主な論文「宮廷に於ける  
崎門学」。

（司会） 上田 賢治

上田 お忙しい中ありがとうございます。タイトルが「近



世の神道思想と国学」という、ある意味では非常に広い、近世神道がどうであったのかという事と関連しながら、国学の発生、成立、その展開みたいなものを問題にするという事だと思えますけれども。

私自身は『国学の研究』という書物になってますが、十八世紀の国学成立に至る過程で出てくる面、契沖、下河辺長流、戸田茂睡、荷田春満といった四人の人についての論文を併せたものです。これは必ずしも当時はっきりしていなかった問題で、安津先生がそれを学位にしろというのでそうなった訳ですが。

近世の神道思想という事になると、儒家の神道論がありますし、これは光圀という人が水戸学を通じて、神道と儒教との関係を調整したりする訳ですけれども、そこらがどういう事なのか、それが展開していくプロセスで、他の信仰である仏教や儒教と、国学がどういうふうに関係するのか、そのプロセスが結局国学の特色を把握する上で大切な問題だと思っております。

初めにそれぞれ発題の方、雑誌を読む時にはこの人はどういう人なのか、近世についてどういう研究をされた人かという事は、はじめに頭に入っているのと入っていないのでは、随分違いますから、自己紹介を兼ねて、その点について話をまずして置いていただきたいのですが、安蘇谷さんから、どうぞ。

安蘇谷 近世神道思想との関わりという事ですけれども、



私は『神道思想の形成』（ベリかん社）が最初に出版した本でした。その中で、神道思想というものがどういうふうにして形成されたかについて考えた訳です。中世神道として伊勢神道、それから吉田神道を扱い、近世神道として垂加神道、それから古学神道を扱った訳ですが、言ってみれば神道思想の中で「四大思想」というものがなぜ生まれたかという事に関心を持って書いた訳です。ですから、直接国学ということでは関わりませんでしたけれども、国学の大成者といわれる本居宣長の思想形成についても、一応触れています。本居宣長の家は熱心な浄土宗であった。それから、当時宣長自身も医者になるために儒

学を勉強していた。にもかかわらず、なぜ神道のほうに入っていたのかという事に関心を持って、「宣長の神道思想の形成要因についての「視点」という論文を書いたのが、神道思想の形成に関わる一つのきっかけになったのでございます。

そんな事で、一応宣長の神道思想の形成に関しては勉強しておりますが、その後、平田篤胤、あるいは岡熊臣という国学者については死の問題という事で、死の問題というのは「生死観」ですね、それでちょっと関わってきたというぐらいでございます。そんなに国学を一生懸命やってきた訳ではないでございます。そんなに近世神道思想というものがどういふものかという事の見通しみたいなものは把握したような感じはしております。大体そんな事でございます。

上田 それでは武田さん。

武田 私の修論は大國隆正で、幕末維新期の頃の国学者の研究をしようという事で勉強してまいりました。その関わりで大國隆正の弟子筋、福羽美静ら津和野系の国学者がいかに明治の国づくりに関わりを果したかという問題にだんだん関心が移ってまいりまして、學位論文としてまとめたのが、上田先生から審査していただいた『維新期天皇祭祀の研究』です。これは明治維新期における明治天皇のお祭りの研究という事ですけれども、一面から言いますと明治維新において津和野系の国学者が、いかに天皇のお祭りやら教学やら教化制



度やらを形づくるに際して、一定の役割を果たしたかという事についての研究でもあると、私自身は考えている訳です。

一般的には明治維新と国学の関わりについては、国学者というのは明治維新になって没落したんだ、時代についていけないでお払い箱になったのだという『夜明け前』なんかに代表されるような抜き難いイメージがあります。それは一面においては正しいと思うのですが、やはりそれだけではない。国学者には、平田派の国学者たちだけではなく、いろいろな流派の国学者がいます。津和野派はその一例でありまして、長州との関わりという政治的基盤をバネとしまして、明治の国づくりに関わり、天皇のお祭りを整える上でも、教化体制を整える上においても、また明治の歴史観、皇国史観として後に結晶化するような歴史観の基礎を据える上でも、一応の無視しがたい役割を果たしてきました。明治維新と国学についての従来の考え方に対して、また違う見方もあるのだという事を示すために、勉強を続けてきたような気がしております。

最近あまり国学の研究をしておりませんが、ご批判をいただいているのですけれども、私自身は国学の原点というものに遡って考えていきたいというふうに考えております。最近、福羽美静が幕末に作った『近世学者歌人年表』を紹介させていただきました。その年表で国学の原点をどこに求めているかと言いますと、慶長四年の後陽成天皇の勅版『日本書紀』の開版、これこそが国学の原点であって、それ以来、天皇の思召しの下に日本の古典を研究する学問が、すなわち中国古典の「四書五経」ではなくて、『古事記』『日本書紀』『律令』『万葉集』といった日本の古典を研究する大きな動きが国民運動として起こってきて、それがやがて明治維新の変革、天皇を中心とする新たな国づくりとなって結実したのだというような歴史観が、そこに読み取れるという事を書いた訳です。そういう事も踏まえまして、明治維新の国づくりの原点として、天皇を中心とする国づくりが、江戸時代の思想の流れの中から、また一般大衆への国学的教養・古典的教養の浸透の中からどのように展望されていくのかという事を、ぜひこれからライフワークとして跡づけていきたいと、そのように念じております。

上田 それでは次に西岡さん。

西岡 私は初めは垂加神道、いまもやっておりますが、垂加神道を研究しております、垂加神道というのは非常に誤



解を受けている、「土がしまりて金になり、土金だ、敬（つつしみ）だ（土金のち）」と、なんだこれはというような感じではかにされるだけであって、実際に本格的に研究されているんだろうか、本当に垂加神道がそんな言葉遊びというか、駄洒落みたいな話だけであれだけの思想的影響を与えたんだろうかというような、単純なる疑問から始めた訳でございます。しかし、それはもうとんでもない誤解で、非常に素晴らしい思想であったという事が、最近わかってきた訳です。

出雲大社を最近私やっております、なぜ出雲大社をするのかと言いますと、従来の神道史の研究は、国学が台頭してくると同時に垂加神道の記事が全くななくなってくる、出てこない、いかにもなんか官長が出たがために垂加神道は滅び去ったのではないのか、というような感さえある訳でございますが、実際はそうじゃなく、垂加神道というのは江戸時代を通じてずっと続いていたのである。それを出雲大社を通じて明らかにしていこうとした訳でございます。

ですから私は最近、ではこの国学と垂加神道がどのように

対処し合ったのか、どのように共存し合おうとしたのかというような問題点を出雲大社の中において見る事が出来ますので、新しい神道史を見る上においても、ちょっと書き直していただかないと思っております。さらに社家の面から垂加神道、社家の面から国学というような見方を最近しておりまして、もう一度学問というだけじゃなくて、そういう垂加神道、国学という学問を、いかに実践の場である社家の方が利用された、利用されたと言いますか、用いられたかというような事も非常に興味を持っておりまして、それを中心にいまやっております。

上田 どうもありがとうございます。

松本(久) 私は、学部の頃は國學院の史学科のほうに入学いたしました、もともと神道学を志していた訳ではなかったのですが。その学部のとときに国学を研究したいというふうにだんだん思い始めたのは、上田先生の『国学の研究』をまず読みまして、それで非常に感銘を受けて、近世においてこのような学問があるという事を知って、それでだんだん神道と国学というような問題を考えるようになりまして、修士の時に神道学専攻のほうで賀茂真淵の研究をさせていただきました。それは何かと言いますと、従来賀茂真淵の「おのづから」というような概念があり、宣長はそれを否定して、そういった「おのづから」というものではなく「神」というのを直接

対象としたというふうな通説がありまして、そのとき私は、賀茂真淵は実はそうじゃなくて、「おのづからに働くものとしての神」というものが厳然とあるのではないか、という事を修士論文で書かせていただきました。

それから大学院の後期課程に入りまして、これはもうちょっと時代を遡らなければいけないという事で、荷田春満の研究に着手いたしました。これも最近では上田先生のご研究以後ほとんど研究がないという状況でありまして、それから一般的には三宅清氏の研究によって、春満の学というものは荒唐無稽であって、国学というものの出発点とすることができないというのがいまだに定説になっている。そういう事に対していったいどうなんだろうかという事を検討して、特に春満の中に見られる『日本書紀』の解釈およびその学問の形成というものを博士課程の時にはやらせていただきました。

その中でいくつか気がついた事として、特に先程西岡さんもおっしゃられましたけれども、国学というそういう思想が出てくる母体としての神社とか社家というものが、そしてその学問と思想というものが、非常に分ちがたく結ばれているのではないのかという事を、とくに春満をやっていると感ずまして、論文のほうでもいわゆる稲荷社の祭神の問題と、『日本書紀』の春満の解釈というものが、関係してくるというような事を論文で、『國學院雜誌』の平成十二年

十月号に書かせていただきました。

今後まだまだ研究途上の状況なんです。春満、そしてその門人、特に中心になるのは遠州浜松の杉浦国頭などの、これも社家なんでありますが、その社家の門人を中心に跡づけを追っていく事によって、国学というものがどういふふうに彼らに受け入れられたか、そしてどのような表現をされていたか、そして神社というものがその学問を受け入れた事どう変わったのかというふうな事を見つ、国学の歴史的發展を追っておこうというふうにいま考えております。

上田 はい、ありがとうございます。

松本(丘) 私もやはり垂加神道を専門にやっておるわけで



ございますけれども、特に山崎闇齋以降、その門流についての研究、例えば玉木葦齋でありますとか、栗山潜鋒を取り上げてたんですけれども。特に関心がございすのは、朝廷と闇齋学との関係についてであります、朝廷と垂加神道、あるいは闇齋学と言いますと、例の竹内式部の「宝曆事件」という一つの頂点、盛り上がりがあった訳ですが、その以前と以後においても、や

はり朝廷と闇齋学というのは強い結びつきがあったのではないかという印象を持っております。さらには水戸学と闇齋学の関係というのも非常に密接なものがありますし、明治維新の原動力になったという事でいえば、やはり闇齋学と水戸学が非常に大きな力を持っていて、国学の比重は、かなり軽いのではないかとというような印象を受けているところでございます。以上です。

上田 『神道文化』の雑誌の性格から言って、これは純粋の学術雑誌ではありませんから、一般の人に近世の学問状態はどういう状況で、そして国学がどういふプロセスで生まれてきて、その思想にどういふ特色があるのかという事が、読む人にわかるように、あまり学術的なことを根掘り葉掘りやられるとちょっと迷惑で、どうしてもお若いとそういう事に凝られるかと思うけれど。

もう一度本題に帰って「近世の神道思想」という事で、安蘇谷さんちょっと言われたように、当時の宮廷の儀礼とか、伊勢神宮の祭祀、あるいは伊勢の神道はどういふふうになっていたのかという。そういう時代の中で、国学というものがどういふ形で興ってきて、それが明治の維新とどう関わって、國學院というのはその伝統を受けて創られた大学ですから、その大きな筋道みたいなものを出来るだけわかるように、それに自分の研究がどう関わっているのかというような角度でお

話ただければ、一番ありがたいのですが。

私自身は国学の発生期、つまり契沖、真淵、宣長に至るプロセスみいなもの、明治維新に国学者がどう関わったかという事で、例えば、大國隆正であるとか、権田直助であるとか、生田萬であるとか、渡辺重石丸とか、そういう種類の論文を芳賀矢一まで書いてますけれども。この江戸時代で国学というものに、学問的な刺激を与えた最初は光圀さんですね。水戸学の本拠地、その光圀が『万葉集』の研究に、当時もう『万葉集』が読めなくなっていた訳でしょう。それをどう読むのかという事に非常に大きな関心を持って、それでその当時、下河辺長流が歌人で名前を知られた人で、その下河辺長流に光圀が万葉について課題を依頼した訳ですね。それが契沖に實際頼む事になる。長流はもう体がだめになっていて、そういう仕事は出来ないという、それで契沖がその頃歌の会で関わりを持って、そこで契沖が引き受けるんだけれど、『万葉代匠記』と「代匠記」と言っているのはそういう意味なんで、それが、初稿本と精撰本というのがありますね。初稿本を光圀さんは突き返している訳ですね。だから光圀という人は大変な学者でもあったと思うのですが、それで精撰本『万葉代匠記』というものが出来る。

それを比べてみますと、これは私の論文で書いた事だから繰り返しになりますけど、初稿本というのは万葉の歌の解釈

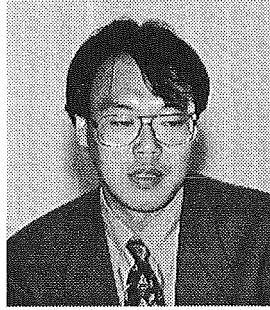
に仏典がものすごく引用されている。それが精撰本でバカッと削られているんですね。つまり仏教的解釈が近世では行われていた。それを改めたことに光圀は非常に感心をして、それを朝廷に奉っている訳です。そういう出発点で、契沖という人がどうしてそういう展開を成し得たのかという、私は下河辺長流という人が歌人として、やはりその事に関わっていたと思っただけです。

その契沖のあとを受けて真淵が出てくる訳ですが、真淵という人について、どの程度承知しておられるのか話をしていただけませんか。

松本(久) 私は一応修士論文が真淵だったので、お話をさせていただこうかと思いますが、その前に春満についてはどういたしますか。

上田 荷田春満という人は、稲荷の神職、ただし「御殿預職」ですけど、確か三代將軍の五十年忌に朝廷から勅使が出される、それにくっついて江戸にやってきて、神田神社に食客として残って、そして「稲荷神道」を説いた人なんです。それが万葉、古典研究に関わるようになった訳ですが。

松本(久) それでそのところで上田先生のご研究を受けてまして、と言うと非常に僭越なんです、春満および真淵の研究という事にちょっといま取り組んでいるところでありますが。そこでまず春満を考えまして、先程上田先生もおっしゃ



されていた。それと後の国学の祖としての春満に一種落差があるという、それはあとからの認識と当時の認識の落差かもしれませんが。

春満の学としては大きく二つに分けられると思いますが、一つは「万葉の学」でありまして、それは当然『万葉代匠記』の精撰本でなくて初稿本のほうを参照して、春満が契沖を受け入れつつも、その万葉の学というものをあきらめていったと。そしてもう一つは「神祇道德説」と呼ばれるものであります。主に春満の場合は『日本書紀』神代巻の解釈でありまして、その『日本書紀』の解釈を独特に、春満曰くですが独特に解釈していくという、こういった二本の柱を春満が立てていったというふうに、大まかには言えるかと思えます。

そのあとを受けたのが真淵でして、一言で申しますと春満

られましたように、その春満の時代というのは、神道の流派というのがたくさんあって、春満に関しては、その中の単なる稲荷神道だというふうに、ちゃんと『神道弁草』という

当時の資料にそう書かれておりますが、そのような雑多なものであるというふうに認識

の万葉学は契沖のものを受け継ぎつつ、さらに契沖よりも精緻になっておりますし、そういった意味で歌の問題は真淵へと深化されていく訳です。

もう一つ神道説のほうなんです、たしかにその「神祇道德説」というのは読んでいてあまりおもしろいものではなくて、非常に勧善懲悪といましようか、善と悪が対立している、その悪を超越するんだと、それは神の力というか、信仰といましようか、そういったもので善悪を超越していくという、非常に粹としては簡単なものであります。春満は、吉田も吉川も、それから垂加も学んでるかもしれませんが、そういったものを学んでおきながらも、それすべて廃棄した上で、いや違うんだという意味で、全く別なものであるというふうな言挙げをした事、それが一つ僕は大きな後の国学の神道説に対するエポックになったのではないかというふうに考えている。つまり破壊者としての春満ですね。従来の十七世紀における神道説というものをここでいったん切ってしまったのではないか。それで「神祇道德説」は受け入れられなかったけれども、いったん破壊したのちにまた真淵学の展開になるのではないかというふうには考えております。

上田 『創造国学校啓』というあの文章について、あれは贗物だとか何とか言われた。三宅清さんが言ってるけど、荷田春満という人はあれは私の発見で、義士に吉良上野介在宅



の日を知らせた。それはちゃんと証拠がある。荷田家は朝廷と関係があって、宮廷の儀礼、有職についての知識があるので、武家有職をやっている上野介がそれを勉強したいという事で習っていた。だから上野介の在宅の日を知っていた訳ですが。

『創造国学校啓』というあれが、実は国学ではなくて、和学だという「靈淵本」が残っているとか何とか、三宅さんが言っているのですが、私は自分で書いた論文読み直さないからわからないですけども、「草稿本」と清書したものと違うんですね、あの「靈淵本」だけが残っているという、河野省三先生も、その問題を取り上げて、『國學院雜誌』にちよこつと書いておられるんですけども、ちゃんと「国学」という言葉を使っている。そういう事なんで、春満の国学内容について、どなたか勉強された方ありますか。

安蘇谷 ちよこつとごめんなさい。いまの松本さんの話で、その「神祇道德説」というのが江戸時代の神道説をみんな打破したというのはどういう意味ですか。具体的に説明してもらわないとよくわからないのです。

松本(久) 打破したという事について、春満はいわゆる吉川流にしても吉田流にしても、あとは儒者流の、そういった神道説は全て用いないんだと。つまり春満が神祇道德という、それは舍人親王がつくられた『日本書紀』に帰結すると、そ

こにあるというふうにし返し戻している訳です。そこで中世とか近世初期のものを否定しているという意義が非常に大きいのではないかなと、私は思っているんですけども。

安蘇谷 ああそうですか。例えば近世の神道論の中で一番基本になるのが、どうも林羅山の『本朝神社考』にも『神道伝授』にも出てくるんですけども、「天皇が統治する道」という、そういう神道の理解だと考えています。その理解が林羅山にあって、それでそれが山崎闇斎も「天照大神の道」という事で具体化してるし、それから宣長も「天照大神の御心によって天皇が統治する道」と捉えている。その間に真淵の「皇神の道」ですか、それなんかも「天皇が統治する道」という神道の捉え方であったかと思えます。それが近世の神道の捉え方として一応主流になっているのではないかと、うに考えているものですか。そしてなぜそういう捉え方をしてきたのか。その原因は、大きく言って二つほどある。一つはキリスト教を中心とした西洋のインパクト。もう一つは儒学、特に朱子学における学問の目的が「道」（国家統治のあり方と人間の生き方）を求める事にあつたからだと思います。キリスト教がやっぱり日本人に影響を与えて、例えば豊臣秀吉なんか「神国」という言葉を使っている。それから林羅山なんか「神国」という言葉を使っている。そういうきっかけになってきたんじゃないかなと思っています。

ですからそういう、もうちょっと大きなパースペクティブで見えていくと、春満が中世神道を打破したというほど、それほど大きな力があつたのかどうかというのは、ちょっと私にはわかりにくかつたものですから、私の以上のような見通しから言うとうですね。

上田 儒家の神道と、国学が説く神道と、どこが違うかというのを、はっきり問題にし出すのは誰なんですか。

安蘇谷 そのところは、私は具体的に答えられません。私の考え方から言うと、やはり『古事記』をテキストにして道を説いた宣長と、『日本書紀』の「神代巻」を基本にした山崎闇齋と、神道の内実についての結論が基本的にそれほど変わらないというのは、やむを得ないという立場なんです。ただし、研究方法がやはり垂加神道の場合と国学の場合は違っていたと言えます。しかしながら、朱子学研究における闇齋の研究方法は素晴らしかつたと言われますね。闇齋のテキストクリティーク（原典批判）というのはすごかつた。例えば林羅山と比べると、林羅山というのは要するに朱子学を最初に日本で唱えたというか、藤原惺窩はどちらかというところあまり朱子学という意識はなくて、儒学を取り入れたけれども、羅山は朱子学というのを強く言つたといわれます。しかしそのテキストに関しては朱子のテキストそのものを使ってなくて、朱子に関するものを弟子たちが集めたものでごまかして

いたと。それに対して闇齋はテキストクリティークがきちつとしていて、それに基いて思索をしたといわれます。その意味では闇齋が朱子学の学者としての偉大さというのがまずそこにあつたのではないかという説もある訳で、私もそれを肯定するので。

ところが一方、日本の古典研究については、実証的な学問が非常に進んできました。例えば、いま言つた契沖、春満、真淵、そして宣長までくると、闇齋が亡くなつたのが十七世紀の後半ですから、宣長の時代と百年以上違ふ訳ですね。そうするとその間にやっぱり学問の進歩があつた。いま大学院で宣長没後二百年ということ、去年から『古事記伝』を版本で読んでるのですけど。とにかく宣長が註釈する際の言葉に対する徹底した追求というのが、これがちょっとわれわれは太刀打ちできないと言いますか、徹底していますね。

上田 儒家の天皇論と、あるいは国体論と、国学の国体論、天皇理解というものの、どこが違うんですか。

安蘇谷 そのへんは、私はあまり考えませんでした(笑)。  
上田 だから天皇が大切だと言えば、みんな一緒という事ですか。

安蘇谷 それはねえ、松本さんあたりが。  
上田 どうぞ発言して下さい。指名されるのを待ってないで発言して欲しい。

安蘇谷 天皇論へいきました(笑)。

武田 いま安蘇谷先生がおっしゃられた観点からすると、賀茂真淵はどのような位置づけになるわけでしょう。

安蘇谷 真淵は『国意考』や『にひまなび』くらいしか読んでいませんで、思想的にも複雑だと思います。あんまり私もよくわからないところがあるので、もう少し勉強しなければならぬところなんですけど。

武田 やっぱり儒学と明確に国学が違うのは、「天地のおのづからなる心」の重視だと思います。窮屈な教えでもって人間を梃づけるのは誤りなんだと、はっきり主張したのは真淵であり、『国意考』だと思ふのです。その考え方ははっきり宣長に受け継がれている訳です。『古事記』の精密な読解は本居宣長の訓読による訳ですけれども、それを待たずして真淵がすでに『万葉集』に依拠して、また『延喜式祝詞』に依拠して、基本的に宣長と質を同じくするような発想、はっきりと儒学とは異なる、柔軟な、しなやかな思想を提起している訳です。そこらへんをしっかりと押えておかなければならないと思います。

安蘇谷 そこまで言い切れるかどうか。真淵をそんなに勉強してる訳じゃないから、批判はできませんけどね。

上田 契沖だって、契沖が万葉理解を従来の仏教家としての解釈の間違いを指摘して、新しい万葉時代というものの姿

を現した訳だから、それを受けて展開されていったんでしょ。う。

自分の専門範囲だけの難しい事を言わずに、国学というのがどういうプロセスで成立し、それがどういう精神だったのか。当時国家の学であった儒学とどう違うのか、それが日本の古典研究にどういう刺激となり、明治維新を生むに至ったのか。大筋では、そういう事との関係で国学、自分がやった国学、国学に関心を持って研究された以上、そういう大筋との関わりで、関心はお持ちだったと思うから、遠慮なしに発言して下さい。

西岡 儒家神道と申しますのは、「神道即王道」という。その王道がこの天皇だけに通じる言葉なのか、それとも、いや王道というのはかなり解釈の幅が広いのではないかという説がまずあります。その説は何かといえますと、革命を是認するんですね、儒家神道家は。一方でその革命を是認しない儒家神道も出てくる、それが山崎闇斎。彼は道はまさしく「日の神の道」と、まさしく「大日靈貴の道」と言っている。それを受けたのが「天照大御神の道」という宣長なんです。ただし、林羅山の場合「神道即王道」と言う場合、非常に解釈の幅がございまして、有徳者でないと天皇にさせないと、だから道に外れた天皇様はどうするんだという、外せ、というような事を平気で言う、これは吉川惟足までいってる訳

です、これは間違いない。しかし山崎闇齋になるとそこから全く変わって、天皇における徳の有無は問題外になった。

では、「天照大神の道」で本居宣長と山崎闇齋の考えは同じなのかというと、またそれは違うのです。言葉は一緒で、革命も否定するけれどもちよっと違う。何が違うかと言いますと、「天照大神と天御中主尊が同体だ」という説を持っていくんです山崎闇齋は。これは伊勢神道の影響を受けておりますから。だから天御中主尊といいますのは、われわれの宇宙のまさしく生命体であると、その宇宙の命を受けているのがまさにわれわれの天皇様始め、万人万物もう分け隔てなく賜ってるんだと。それが「大日靈貴の道」であり、まさしく「日の神の道」である。ですからこの「日の神の道」というのは、われわれの要するに生命にも関わるものであるから、それが攻撃されたり危ぶまれたりした時には命をかけて守りなさい、というのが山崎闇齋の神道論。

それに対して宣長は、そうじゃなくて、四界万国に天照大神の御徳が漲っているんだと、だからわれわれ、とくに日本人は受け入れなさいと、学びなさいという。だからちよっと違うんですね、至って説明不十分ですが、同じ「天照大神の道」でも違うところでは私はあると感じておる訳です。

上田 今日目の眼から見て、変な事を言ってるというのが一杯ある訳で、だから我々が歴史的に振り返ってみて、江戸時

代、近世の学問の状態がどうで、その中で国学がどういう意味を持つのか、どういう特色を持ってるのか、そういう事、性格がはっきりすると、これは國學院の創立とも関わる訳だから。

天御中主をやった人はいなかったですか、篤胤の天御中主論、篤胤をやった人はいないですか。篤胤はたしか天御中主を非常に中心的な神格として取り上げていたように思いますけどね。伊勢神道というのが、どれ程の時代的影響力をその当時、持っていたのかどうか、そこらの関係もはっきりしないと確実な事は言えませんが。

松本(久) 一つよろしいですか、最初武田さんのおっしゃられたように、いわゆる慶長勅版が出発であるというような事を、明治のときの国学者が言った。それで篤胤の場合なんか『玉響』のほうで、いわゆる神君徳川家康、それから尾張、そして水戸という継承を国学の出発地点として見ている。

そしてもう一つ思うのですが、それで先程の伊勢神道なんかも広まっていたのはどうなんだろうというのと、これも度会延佳の著作がかなり早い時期に出版されているので、いま私が考えてるのは、そういう出版の状況と学説がどういうふうに受容されていたかという事で、その出版というのが非常に大切であるんじゃないかと。そういう意味では延佳なんか『鼈頭旧事紀』であるとか、あと『古事記』のほうです

よね、そういったものが早いうちにもう十七世紀中盤ぐらいから出ているので、そういう意味で非常に大事だなというふうに考えておきまして、話がつながらないかもしれないですけど、国学の前提として十七世紀の半ば頃の事を考えておきますけれども。

上田 学統から言うところ「四大入」という言い方があって、その事についてはどうですかね、それは正しい説ですか。

松本(久) それもいま非常に気になっておきまして、平成十二年度の神道宗教学会の大会でちょっとお話ししたんですけど、真淵と宣長の弟子の栗田土満がおりますよね。土満が『神代紀葦牙』で書いているんですけども、つまりいわゆる漢意を去って正しい「やまとことば」で記紀神典を理解する方法というのは宣長が言っているんだけど、それは実は真淵が晩年言っていた事であって、かつ、真淵が晩年土満に語ったところでは春満が実はそういう事を言っていたと。当時春満の時代はまだいわゆるほかの思想というものが非常に強かったので春満は言えなかったけども、真淵にそれをそつと言ったと。真淵がそれをまた土満に語っている訳なので、非常にそういった学統としての流れの春満から真淵、そしてまた宣長というのは、非常に早いうちから言われていたんじゃないかと。例えば、内野吾郎先生がおっしゃるところによれば、そういうものは後期の平田派がつくったものであって、その

前は「三哲」が先行するんだというような言い方をなさったんですが、いや、それは三哲という見方もあったけども、並立的に「三大入」というような言い方もあったんじゃないかと私は思っていて、特に神道とか神社に関わる人間のもっていた強い意識なんじゃないかというふうにも考えているんですが。

上田 あまり学問的になり過ぎない、論文を書いてもらっている訳じゃないんだから。一般の人に解り易い筋道を話してもらえばいいんですがね。徳川時代というのは幕藩体制ががちりして、神社奉行が担当、管轄していて、神道は仏教の下に置かれていた訳ですよ。その時代に国学者たちが、日本の国の本来のあり方はこうなんだという事を言い出した。それがどんな筋道で大きく育って行って、明治維新につながるんだらうか。それにどういう人たちが、国学の思想のどういう思想がそれと関わって行ったのらうかという、そういう筋道が明らかになるでしょうか。

西岡 日本の優秀性と言いますか、日本人は優秀なんだというような考えをまず是といえますか、それを国学者はかなり非常に武器にしていって行く訳ですね。儒学者からも日本人は優秀というような発想が出てくる。それも実は護国学派から出てくるんですね。そういう護国学派の影響を受けてる賀茂真淵なんか、『国意考』を作っていく。ですから日本人の優

秀性というこのブームの中に、国学がさらに勢いを増して行くというのはい言えるでしょうね。

上田 春満から真淵という学問的つながり、真淵から宣長というつながりが有るのか無いのか、宣長から更に維新にかかる平田篤胤という、その国学の学統というもの、つまり国学というものの持っている性格を明らかにする上で、学統というのは問題になると思いますが、そこらについて意見があれば聞かせて欲しい。

松本(丘) 皇學館の松浦光修さんが最近いろいろおっしゃってます、「四大人」のような、国学の学統というのは…。

武田 考え直さなければならぬという事を言ってますね。

上田 そういうのを有難がるのは馬鹿げているという？どういう意味で言う訳ですか。

松本(丘) 大國隆正が言い出した事が起爆となつて、それが近代の学問に深くしみついてしまったという事らしいのですけれども。

上田 隆正思想が影響したという事ですか。

松本(丘) ですから国学の中の学統というのは、あまりあてにならないような気もするんですが。

上田 隆正という人はいろんな西洋の事にまで、地理とかそういう事にまで手を拡げて、世界の中で日本がどうという事を考え始めた人でしょう。だから少し悪口を言えば大法螺

を吹くところがあつた人だと思ふけど。

武田 従来の学統観は成り立たない、という説は確かにその通りかもしれません。しかし、やはり学問というのは人間の関わりの中で、人間関係の中で育っていくというのが、一面の真実だと思ふのです。例えば、本居宣長が京都で契沖の『百人一首改観抄』に接しなかったらその後の本居宣長の学問があつたでしょうか。私はなかつたと思います。あそこであの本に触れて、「やまとことば」と「やまとごころ」の何たるかを知る事がなかつたら、その後の宣長の学問はかなり違ったものになつていたと思います。

これもまた有名な話ですけども、賀茂真淵と本居宣長の「松坂の一夜」、あそこでもし二人が出会っていなかったら、その後の宣長が『古事記』の研究に一生を費やしていたかどうか。あそこで出会ったことが宣長のその後のライフワークの出発点になっているのは疑いがない事実だと思います。賀茂真淵は、たった一晩会っただけで宣長の何たるかを見抜いて、『古事記』を訓読し得るのはこの若者しかいないと、すべてを託した訳です。

そのようなところから考えていくと、やはり宣長と篤胤との関わりという事も大切です。篤胤は宣長に会えなかつた訳ですけども、「魂は翁のもとに往かなむ」という有名な歌の通り、宣長への傾倒が、篤胤の学問の原動力でした。そう

いう個人的な関係、個人的な絆が国学という学問の発展に連なっている。その系譜は明治維新を経て、現代にまで続いているともいえるのです。

明治維新には本居宣長系の国学は全然関与しなかったとする説が一般的ですが、例えば、国学系の志士の代表として加納諸平門下の伴林光平は、天誅組に参加して文字通り命を捨ててゐる訳です。あるいはその鳥取のほうの同志筋の飯田年平は、天誅組の連中と関わりがあった国学者であつて、門脇重綾という明治維新の福羽と並ぶ大立者はその弟子です。そういう意味で人脈というものはずっと連なつてゐる。一見絶たれてゐるように見えても実はつながつてゐて、それが現代のわれわれまで受け継がれてゐる。皇典講究所に結集した国学者の人脈中にも、遡つていけば、契沖以来の学問的絆が連綿と受け継がれてゐると考へるのでなければ、本當の意味で国学を受け継ぐという事は出来ないのでないか。

国学を学ぶ者として、人から人へ受け継がれてゐる学問的絆というものをあらためて重視しなければならぬと思ひます。

松本(久) また話を受けたような形になりますが、その人間のつながりという事で考えておきますと、こと神社とか神道とかについて、いま考へられる事はやはり社家の門人の問題なんです。特に私はいま浜松とか遠州とか三河とかを対象

にしておりますけれども、その人のつながりで特に春満から杉浦国頭へと、そして国頭から多くの浜松周辺の、そして遠江・三河というふうな受け継がれていく訳でありまして、かなりの社家がつつと門人になつて、代々宣長や篤胤の門人になつていく訳であります。

そして、有名な遠州の幕末の報国隊のような、神主隊なんというのも作つていく訳でありまして、そういったような人物の掘り起こしという事も大切なんじゃないかと思ひますし、具体的に国学が神主にどういふような影響を与えたか、祝詞の作り方一つにしても、国学が入つたあとと、入る前とは違ふのかというやうな事を、こういうふうにつぶさに見ていつて、人間のつながりを見ていく事も、この神社と国学という関わりの中で、それで現代的にも捉え返される問題だと私は思つてゐるのであります。

安蘇谷 松本さんは、学統というものは垂加神道と比べると国学の場合は弱いと、それを言いたい訳でしょう、それをちゃんとやつておかないと。

松本(丘) 言葉が足りませんで……(笑)。

安蘇谷 国学の学統を武田さんに演説されてお終いだと(笑)。

上田 篤胤という人はしかし、実際は秋田から出てくるのに一両かなんか握つて、乞食をしながら来たんだと思うけど

も。あの人は御三家回ってみんな断られて、食うや食わずでいて、いろんなアルバイトをしながらやっとな食いつない人だけれども、その篤胤の勢いというのは、生田萬というのが出てきますけれど、生田は篤胤のところへ下宿するんだけれども、夫婦の間でおかしくなっちゃって、飛び出るんですが、最後に陣屋に斬り込んだ。私は随分作られた話の部分があるという事を、証明したつもりで居るんだけど。明治維新につながっていく大きな国学の精神というのは、國學院大學が創られた事ともつながって来る訳ですが、国学者のうちでどういう思想が最も大きな影響を持ったのですか。

松本(丘) 私の印象としては国学内部からではなくて、それは幕末の時流に乗って維新に：。

上田 幕末の時流というのはどういう。

松本(丘) 幕府の力が低下してからそういう国学者の活動が目立ってきたという感じで、その根となっていたのは水戸学なり垂加神道が培って来たものだと思います。

上田 水戸学が培って来たという、水戸学というのは本来儒学でしょう。

松本(丘) 結局その儒学の名分論でないと朝廷と幕府の関係を正していくという考えが、出てこなかったのではないか。国学というのはやはり現状維持的などころが多分にあると思うのです。朝廷と幕府との力関係、これはおかしい、その現

実を变革していこうという事を説いていたのが：。

上田 明治維新は国学の力じゃなくて、儒教それ自身から出て来た。

松本(丘) 儒教的な名分論があずかって大なるところがあつた。それを日本的に敷衍したのが垂加神道であり水戸学であつて、その武家政治に対する懷疑が復古への大きな流れとなり、幕末になってから国学がそれに乗って来たという構図が、私の印象としてはあるんですけれども。

上田 生田萬なんていう人は、実は結局どうしようもなくなつて決起したんだけれども。明治維新に関わつた国学者というのはいないという事ですか。

武田 逆に尋ねたいのですけど、明治の「官員録」に垂加系の志士がどれぐらいいますか。

松本(丘) 結局垂加神道という形では残らなかったかもしれません。

武田 水戸学的・垂加的な理念を、それでは具体的にどのような人脈・集団が担っていたのか、という事に注目しなればならないと思います。

松本(丘) そうですね、学習院にいた中沼葵園や平戸の楠本碩水など、漢学系で何人かいたというのがありますが。

武田 私の考え方は具体的で、要するに神祇官のトップに座つたのは誰か、政策決定に影響力を及ぼしたのは、実際



に政策を立案したのは誰かという事です。それが私の立論の根拠になっている訳です。

上田 明治の維新に関わって、京都に和漢の学をする、教える学校が造られて、それが東京へ持って来られて、だから東大の母体になるんだけど、國學院の母体でもあったんだけど。そこで和漢の学者が喧嘩ばかりしていて、成り立たなくなってしまう。漢学が江戸時代日本人に与えた影響の強さというのはその通りだと思ふのですけれど。新しい時代を創っていく上で、国学がどれ程の力を持ったんだろうかという、そこらのところはどうなんでしょうか。武田さんはそれを国学が一番大きいと。

武田 そうは言ってないんです。維新という複雑巨大な政治変革を、単一の要因に還元する事は出来ないと思ひます。むしろ国学も含めてそういう広い意味での皇道、それこそ天皇統治が日本の国の原則であるという広い大きな枠組ですよね。それが国学の流れとしてもあるし、垂加の流れとしてもあるし、そういう大きな潮流が明治維新に結実したと考えるべきと思ひます。

ただやはり、先程来気になっているのですけれども、例えば、本居宣長について現状維持の思想であるとするのが一般的な見方なんですけど、それは本当にそうなのかと私は考えるのです。彼の間人観は、「産霊の御霊によって全てが生成、

成長しているのだ」という側面と共に、人間というものは産霊の御霊によってあるべきかぎりのわざをほどほどに行つて、国家的な役割、公的な役割を果たしていかなければならないのだとする一面も持っていたと思ひます。「たおやめぶり」の人間観ももちろん主張されているのですけれども、それと共にそういう人間のポジティブな主体性を喚起していくような思想というものが確かにあって、宣長はそういう思想が自らにあればこそ、かえって慎重な世渡り、慎重な処世をしたのだと私は思ふのです。

そこを現状維持というふうに捉えるのが、いままでの国学研究の常套的な見方だった訳ですけれども、しかし幕末になると、明確に倒幕を謳つた国学者たちが輩出してくる訳です。

安蘇谷 倒幕を謳つてるの、いつ頃？

武田 文久年間に、等持院の足利將軍の木造の首を斬つた連中なんか、そのさきがけでしょう。歌文派系の者でも、例えば、先程の伴林光平、津和野の福羽、鳥取の門脇、近江の西川吉輔など、いままでの見方を訂正するような、現状変革的な行動を行った国学者らの事例が近年多く紹介されています。

松本(丘) それはだいたい時代が下ればあると思ひますが。

安蘇谷 倒幕思想というものがあって明治維新が起つたのかどうか。あるいは倒幕思想の先駆的な人物は誰だったのか

調べたいなと思っただ事があります。どうも宇都宮黙霖とか大橋訥庵とか、やっぱり吉田松陰も晩年に倒幕思想を持ったのか、持たないのかというのが問題になりますね。その前に宇都宮黙霖と書簡の交流があつて、その中に出てくるというのは早いほうなんだけど、それより早いのが、国学者のほうか？。

武田 安政五年の段階では、それが本当の倒幕になるかどうかは、まだわからない時代でしょう。

安藤谷 ただ、吉田松陰なんか結局殺された理由の一つに、やはり老中暗殺計画なんという事がある訳だから。それはちょっと細かい話ですから止めますが。私もいま大きな流れの中で国学は明治維新運動にどういう影響を与えたのかという問題について触れてみますと、一つは、さっき松本さんが言った水戸学の、特に後期水戸学の影響というのが、明治維新という運動を見ていった時に最も大きいと思います。例えば尊王攘夷思想、夷狄を討ち払うという考え方が、国学にももちろんあるんだけど、会沢正志斎とか藤田東湖とか、ああいう人達のほうが漢学を背景に武士たちに影響を与えたという意味で、これはやはりもう決定的だと思います。だからいくらか国学者が主張するよりも、やっぱり会沢正志斎とかそういう人の影響のほうが、これは量的にもどうしても多いと思うのです。武士階級に対して直接影響を与えている、これはもういろいろな証拠があると思うけれど。

ただ、会沢正志斎がなぜ出てきたかというところ、やっぱり正志斎の先生であつた藤田幽谷、幽谷がなぜ出てきたかというところ、彼の思想の中に、何が正統なのかという、日本の政治の正統性をどこに求めるかという問題があつて、幽谷は、本居宣長の「天皇が統治する道」という思想の影響を受けたのではなからうか。それが私は国学が比較的早く後期水戸学、もちろん後期水戸学そのものの性格の関係もあるから一概に言えないけど、そのへんが一番影響が強かつたのではないかと思う訳です。だから明治維新以後は神祇制度復古とか何とかという事では国学の影響力があるけれど、やっぱり明治維新運動全体という事になるとむしろ後期水戸学、あるいは武士階級に非常に影響をもっていた垂加神道のほうが、流れとしては影響力が大きかつたのではないだろうか、そういう感じはちょっと持っているんですけど。

上田 漢学というか儒学が国家の学で、優秀な人材がそこにおいて、時代の大きな変革も、明治維新というのは西洋の勢力とも関わっていて、その事情をどの程度政治的に判断が出来て、どう対応しなければならぬかという事を考えた人たちの中に、儒学的な教養を持った人が多かつたという事は、それは当然言えると思いますけどね。

ただ、国学が何も関わっていないかというところ、大國隆正なんかは盛んに言ってるわけですよ、やっぱり。あれも西洋の

思想をいろんな形で学んでいる訳だから。ただ、実際にどの程度の力を持ち得たかという事ですけどね。そこらのところは忌憚なしに、國學院というのは漢学と喧嘩しておん出たようなもので、やっぱり江戸の教養というのはどうしても漢学なんでしょう。だから勢力は漢学の方が明らかに強かったと思うけども。だから明治になって言うんだけど、その明治になって明治陛下を中心にする思想形成が、どうして儒学ではなくて国学になったのか、それを説明出来ますか、儒学が優勢でということになると。

松本(丘) 結局「教育勅語」にしても、儒学といえは儒学ですから(笑)。

上田 言葉はね、それは「やまとことば」と漢語の熟語というものの違いがそういう事に現れるんで、「やまとことば」で言うと冗長というか、何となしに慣れない人の物の言い方で(笑)。だから漢語で言えば非常にはつきりした熟語で、一つの熟語に非常に大きな意味が込められているから、そういう便利さであって、漢学の思想ですか、それは。

武田 中国の古典に「皇祖皇宗を仰げ」と書いてないでしよう(笑)。

上田 天理に基づいて動くんであって、有理革命でしよう儒学の思想は。そうすると徳川幕府を倒して天皇制、新しい出発をしたという事は革命ですか？革命と解釈するのか、復

古と解釈するのか。

武田 国学の一番メルクマールは歌だと思うのです。その歌が江戸時代に非常に盛んになる所以はどこにあるかというのと、先程、後陽成天皇の事を話しましたけれども、その跡をうけた後水尾天皇が、『勅撰集』『伊勢物語』『源氏物語』などの古典を自ら研究され、さらにお公家さんたちが詠んだ歌を添削されたりして、日本古典と歌道の振興に尽力された御事跡に淵源すると思います。『禁中並公家諸法度』に天子は芸能やら和歌を専らとすべき事とある訳ですけども、その規程を逆手にとって、歌こそが「日本固有の道」であるとする、非常に大きな歌の運動が宮中から起こってきて、それが江戸時代における和歌の興隆の一番の発源地となったのではないかと考える訳です。

本居宣長は『新古今集』大好き人間だった訳で、もちろん契沖も『万葉集』大好き人間でした。賀茂真淵は『万葉集』から「日本の道」を説き、儒学のように人間を狭く枠づけるのではなくて、天地の自ずからなる生命が成長していくように、伸び伸びと万物を育むのがわが国の固有の道であるという事をきわめて伸びやかに、しなやかに説いた訳です。天皇を仰がなければならぬという原則については、儒学や垂加と一致しても、そのニュアンスというか質は、「やまと歌」の感性が基本にあるという事を押えなければならぬと思う

のです。その「やまと歌」の営みによって、歌のところで国民の心をやわらげる、「言向けやわす」というような営みは、儒学や垂加のよくなし得るところではなかった。

明治の世の中になって、新年の「歌会始」が非常に拡大して、それまでのお公家さんだけではなくて、国民一般の歌を広く募集し、天皇を中心として国民が全て連なる歌の座として「歌会始」は拡大されていく訳です。それにあざかったのはやはり国学者の近藤芳樹です。長州出身の国学者で、膨大な日記を残しています。行幸にもお伴をして「やまとことば」で流麗に綴られた和文の紀行文も執筆しています。もちろん主流には、儒学流の政治思想の担い手になった人たちがいた訳ですが、それとともに、そういう国学的教養、「やまとことば」「やまと歌」の教養の担い手が、やはり明治天皇の「国民の心をしらしめす」ソフトな、柔らかな天皇統治に尽力していたのです。

そういうような観点から見えていく場合、やはり儒学とは質的に異なる国学の柔らかくしなやかな特性が、明治の国づくりに、天皇統治にいかにか反映していったかという事は、今後の興味深い研究課題だと思っています。

安蘇谷 だけどあんまり、儒学と国学をそんなにきちんきちんと分ける必要がありますかね。だって儒学であって儒教を全然日本人は取り入れてないですよ。

武田 しかし国学者たちは、儒教をしつこく攻撃した訳です。

安蘇谷 攻撃はしたけど、篤胤なんて結構儒学取り入れてる訳だから。

武田 山県有朋なんかも素晴らしい歌を詠むとともに立派な漢詩も詠んでいた。

安蘇谷 そうです、たくさんいます。儒学者というのは結構和歌も詠んでいますね。

武田 もちろん明治の国作りというのは、「やまとことば」一色だった訳ではなく、「からごころ」と洋才とを兼ね備えていました。

西岡 国学というのは宣長さんが言うような、純粹国学じゃないでしょう、かなりもう儒学が折衷してるじゃないですか、もう幕末になってくると。

安蘇谷 後期の儒学なんかそのようです。

西岡 だから純粹な、まるで宣長さんの純粹なのがそのまま何か明治まで来たというような感じは消えてしまう。そうじゃなくて、そうじゃなくて言うのは何だと言うのがあるんだけど。

武田 あなた方の話を聞いてると、闇斎さんの純粹培養がそのまま明治維新にきてるとい感じがする(笑)。

上田 ちょっとこのあたりで喧嘩をして欲しい訳だけでも、

明治になって國學院が創られる訳ですが、その国学の理解でずうっと私が気になっているのは、国文学の伝統という国学の理解の仕方と、神道というものを中心としての国学の理解の仕方が、國學院でも我々が学生の頃からある、折口先生とか武田先生とかという文学の方によく知られた先生が出て来たから、そういう事になったのかも知れないけれども。折口先生は民俗学、柳田先生とは少し性格の違う民俗学なんだけれども、それを展開したという事で特色があるけれども。いわゆる近世の国学の道統を継いでという感じ方は、我々の頃の学長であった河野省三先生がそういう事を非常に強く言われた人なんだけれども。現在「国学」というものは、学問として生きているのか、もう近世で終わったもので、国学というまとめ方では言えない、分化されたそれぞれの学問の中に落ちて着いてしまったのか、それが良いのか悪いのか、そういう事についてどうなんですか、自分たちは国学をやっているとあなた方は思っておられるんですか、思っていないんですか(笑)。

松本(久)　そういう意味でおっしゃられますと、私はあくまでも現状は国学者研究であったり、国学史の研究であったりして、私自身いつも考えて国学をやっているとは言いがたい状況であるとは思いますが。

でも私がなんで国学者の研究とか国学というのをやるかと

いうと、やはり日本人の神道なり神社なりというものにかに先人たちが、そういう神を考えたりしているのかという事を受け継ごうという意味で、国学の研究をしているという、そういう意味でいけばどうなのかなと、自分自身まだ非常に未分化な状態であるんですけども。

上田　国学という学問の本質をどこで捉えるのかという、国文学系の人たちが言う国学という捉え方と、神道系の人たちが言う国学とは、一致しているのかいないのか、現代の國學院大學に関係した人たちはどう理解しているのか。

それは単純に自分の考えを何か言って、それにケチがついてどうこうなんという事を考えてはいけない(笑)。国学というのはもう大学の名前で残っているだけで、近世以来の伝統は存在しないと云うのか、存在しているのか、存在しているとすればどこに存在しているのか。どうぞ喧嘩して下さい。いやそういう理解はおかしいという。いままもなくとも神道学科を出た人間というのは、神道学科が国学の伝統を継いでいるんだと思ってるのが多いと思うけど、国文科、國學院の国史なんていうのは藤井貞文先生がいなくなってから、あるいは樋口先生がいなくなってから、国学なんという事は全く考えていない。そんな事言うと舌禍問題を起すだろうけれども。そういう事についてどうですか、いま生きてる自分たちは、国学の伝統を継いでいるのか継いでいないのか、継いでいるとすれ

ば何を継いでいるのか、そういう事について話してみてくれませんか。

松本(久) 明らかに私はとりあえず、いや、とりあえずじゃなくて神道学としての国学を現状としてはやっている、これはもう明らかにそう認識しておりますね。

上田 その場合の神道というのは、神社神道の伝統という事ですか。

松本(久) それも含めたものと、思想も含めたもので、私はいま思想なるものと、現状というか神社なるものというのがいかに結びついているのかという事を考えている訳です。その中でいつも参照されるのは近世の国学者であるというふうに認識して、近世の国学者の研究をしているのですけれども。

上田 『万葉集』というものが上古最大の歌集で、そこから学ぶんだという、「大和魂」というか、日本人の文化理解の中心にある精神というものを学び採る事ができるんだという言い方がある訳ですけれども、そういう考え方で、神道研究がそれと並ぶ形で、現在われわれが考えるべき国学の中心に、どういうふう位置づけられると考えておられるのか。そんな事は考えた事は無いなんていうような(笑)。

安蘇谷 武田さんですか、国学は歌だという説からは、  
武田 歌を基礎付けるのは、やはり古典です。神道は古典・

思想・祭祀だと先生がおっしゃっておられましたけど、古典を考える場合『古事記』『日本書紀』という事になる訳です。それを抜いては神道が考えられない訳ですよ。われわれがいまでもそれを拠りどころにして日本の国のあり方、日本人としての生き方を考えざるを得ないとしたら、その営みを、とりわけ『古事記』をテキストとして始めたのはやはり国学であると言う事が出来ると思います。

古典を拠りどころとして、いまの時代情勢とも噛み合わせながら、日本の国のあり方、日本人としての生き方を考えていくという事であれば、それは広い意味で国学の営みという事が出来るのではないか。日本で本当の学問をやるうとしたら、日本の歴史や風土、島国の民族国家としての特性を踏まえて学問をすればいい、それは国学にならざるを得ないのではないかと思えます。わが田に水を引く強弁と思われるかもしれませんが、自国の宿命を踏まえて、日本の国はどうあるべきなのか、日本人はどう生きるべきなのか、その問いに對して正面切って向かい合ったのが国学の先人たちです。先人がその課題にどのような答えを出したのか、その答えをそのまま虎の巻のように借用する事はもちろんできない訳ですが、そのような先人の姿勢そのものを受け継ぎ、改めて新しい時代の中で、古典を拠りどころとしながら、日本人の魂について、日本人の生き方について考えていくという事であれ

ば、それは広い意味での国学の営みになる訳です。「新国学」という言い方がありますがけれども、藤井貞文先生の言い方を借りれば「常に新しい国学として、新しい時代状況に応じて生まれ変わっていくべき学問」として受け継いでいかなければならないと思います。

古典を拠りどころとして、また「やまとことば」を拠りどころとして、日本人というものを考え、自分の生き方を考えざるを得ない以上、国学のアクチャリティが失われる事はないと思います。

上田「記紀・万葉」という言い方をしますね。歌というのも、「記紀歌謡」もある訳だけれども、『万葉集』と「記紀歌謡」というのとは随分性格が違うものだけれども、『万葉集』というものは、奈良時代の日本人の自然、あるいは天皇に対する歌もある訳だけれども、それがやはり神道の中核にあって、今日もわれわれが国学を考える時にはそれを中心にして考えるべきだという形で、私らが習った先生、折口先生とか武田先生とかいう人、特に武田先生なんかはその事が。あの人の黒板に書く字は本当に、ものすごい近眼なんですよ、和本のこんな大きな字をこうやって本に顔を近づけて見る人なんですけど、消すのが惜しいぐらいきれいな字を書かれたんですけども。

そういう精神と、もう一つ私は自分がいま取掛ってる、

『古事記』『日本書紀』といっても、『古事記』と『日本書紀』ではずいぶん性格が違うと思う。私はその一番大きな違いは神話にあると思っていて、神話の伝え方が『古事記』と『日本書紀』ではずいぶん違う。歴史時代を見るためには『日本書紀』が優れている事はもう歴然としていますね。しかし神話を見ると、いまそれと取り組んでいるのですけど、『古事記』と『日本書紀』がまた違う意味で、全く違うという感じがする。『日本書紀』というのは明らかに中国を意識してまとめられている。なぜ『古事記』『日本書紀』という二つの書物が短い時間の間に編まれたのか。『古事記』は中国人読めませんよね、『日本書紀』は読めるんですよ、意味が解るのです。だからその違いを考えて見ると、近世の国学者たちが『古事記』というものをもう一度発見して、それまで読まなかったものを読み始めたという事は、非常に大きな意味を持っていると思うのですが。

皆さんはそれぞれの専門、近世やってたらもう『古事記』とか『日本書紀』とか、ちゃんと本気で読んできるといふ事は遠ざかってしまっているのかも知れないけれど。そういう事について、今後われわれは国学と言われるもの、國學院大學である以上、「国学の精神」は何かという、それについて明確な自覚を持って、その精神に則った学問の展開を図って行かなければならないという事は、当然考えるべきだと思うの

ですが。そういう点についてそれぞれ、一人づつちゃんと書いて、締め括っていただけませんか。

安蘇谷 ちよっといま、国学が生きてるのかどうかという、いまの問題の前にちよっと述べたい事があります。私なんかは社家の出身ですから、国学者の篤胤なんか読んでると、とにかく社家に対する批判というのはすごいんですよ。「鈴振り神道」とかです。それがやっぱり宗教というものが持っているいやらしいさみなのがある訳です。これは神社を管轄したり修繕したりとか、祭りを継続していくためにやっぱりお金も必要ですし、それなりの収入もあげなくてはならない。そうするとそれを批判する。言ってみれば篤胤とか宣長は別に神主で飯食ってる訳でも何でもないです。から。そういう純粹な道を求める立場から、「鈴振り神道」とか何とか、要するに金儲けやってるような、もちろんそれは神仏習合的なものに対する批判というのもある訳ですけども。

それから国学というものが、例えば、『国学者伝記集成』なんか見ると、もう歌詠めばもう国学者だと。そういう問題もあるし。私はどうしても国学というのを古代の事実を通して道を求める学問、いわゆる「古学神道」というふうな位置づけたいのです。それで、それはやっぱりただ歌を詠んで、ただ『伊勢物語』を研究した、『源氏物語』を研究した人、

それとやっぱり道を求めると言いますか、そういうのと異なると。私は少くもそういう意味での道を求める学問としての国学なら、神道とイコールであるという位置づけをして、その意味で国学は自分に生きているというふうな捉えたいと思ってます。

ただ、私は上田さんのお話で「神話」という言葉はあまり好きではなくて、それは「神代の物語」とか「神代の古伝承」として捉えていったのであって、どうも「神話」という言葉は死んだ神々の物語みたいな、神道家は使いにくい気がします。

上田 それは現代的な学問雰囲気の中で。

安蘇谷 キリスト教の『聖書』は「神話」とは言わないというような意味もあるものです。まあ「神代の物語」というものは私にとってなぜ大事かと言ったら、それは神様のご意思というものはそこにしかない、そういう意味で私は大切なものです。

上田 「神代の伝え」ですから、それを言うのに、いま日本語で「神話」と言うししょうがない。

安蘇谷 客観的に比較神話なんかやってる連中は、全く神々信仰とは関係ないですから。まあ信仰の立場から言うと「神代の伝承」とか「古伝承」とか言って欲しいと。

上田 それでは最後に言っておきたい事を。



西岡 ちよっと話題を遡って、国学と聞けば、宣長の国学をどうしても意識するんですね。国学といえば、純粹そのものだ、そのままというような意識になります。これは社家に入っていると、社家でも全然通じませんが、これは社家は。社家の中でまたうまく何と言いますか、使い方を分けていく訳です。出雲大社では千家俊信なんかはもうそういう取り方を使っている訳です。こういうのは宣長で完璧なものが出来たら、あとはもう出来る訳がないから、平田篤胤の使い方とかいろいろな事になってくる。

宣長が一番言いたかったのは何なのか、わかりませんが、でも、宣長の学問が明治維新を動かしたかどうかとなると、私は誤解していると思いますけど、宣長の学問、あの純粹な学問、それは『直毘靈』で、おそらく宣長は最初じゃないかと思っております、『直毘靈』のまさしく最初の冒頭に「皇大御國は」という、これはまさしく世界で一番優秀な、一番素晴らしい国はわが国ですというような事をちゃんと言っている訳です。そんな事は儒者は誰も言っていない。儒者は常にいわゆる支那とのみしか比較してませんから。それを四界万国の中で一番優れている国は日本ですよ、というような事を宣言するのは宣長からじゃないかな。もうそれはおそらくそういう優秀性をまず言ってる。

と同時に幕末に水戸などの天皇をどうしても守らなければ

いけない、というのが融合して来る。要するに日本が一番優秀だ、というのと、天皇は統治するだけでなくて、天皇を守らなければいけない、というような思想が入ったときに、要するに国学と儒家神道が合体して、大きな力を出すのではないかなと。

松本(丘) 「学統」という言葉がさっき出たのですが、私はそれを否定する気は全然なくて、やはり先程武田さんがおっしゃいました、先人の心を受け継ぐというのが、やはり学問の根本にあると思います。

それで国学というのも、いわゆる国学者の国学というのではなくて、土佐の谷秦山が、「日本の学」という事を説かれているのですが、儒学などの他のものも否定せず、日本の道のために役立つものは大いに取り入れ、日本の神道を中心として、他の学問を羽翼とする、そういう学問をせよという事を言っておられます。国学には頑迷固陋なところがあるとよく言われますけれども、そういう垣根を取り払って、その日本の学というものを後世に受け継いでいければというふう

に思っております。

上田 私はいま現在の事を言っているので、近世の国学の事を言っているのではないのですが、頑迷固陋というのはどういうところに頑迷固陋なんですか(笑)。

松本(丘) 何でも「からごころ」という事で、一緒くたに

切り捨てて(笑)。

上田 そんな事い言ってる人がいますか。それは平田篤胤はそういう批判をされるかもしれないけど。はい、それじゃ。

松本(久) 私もまだ学問途上ですが、とにかく課題がたくさんあるなという事をい思っております。それでやはりいま必要な事というのは、いわゆる四大人中心の学説というものはありますけれども、それをいかに、受容した人々がどのように感じて、どのように行動したのかと、そういう事の掘り起こしをやっていきたいなと思っております。そうすれば江戸時代、そして明治、さまざまな人々の動き、そしてなんでも国学というものが受け入れられたか、または受け入れられなかったのかというような事が、一つづつ見えてくるのではないかとというふうに感じもしております。

それからもう一つ、以前、日本文化研究所で主催した国際シンポジウムのような、眼というものも必要かというふうに思っています。ややもすると思考、視野狭窄に陥りがちになってしまうので、やはり近代のナシヨナリズム形成の中で果たした役割りというものを比較していくような作業、というような課題などもいろいろあるなと思いますが、一つ一つやっていきたいという気持ちです。

武田 先程上田先生が『古事記』と『日本書紀』の間には大きな違いがあるとおっしゃいました。本居宣長以前は『日

本書紀』が聖典であって、朝廷で講読されていた一番の権威ある古典でした。その流れがもちろん垂加や儒学、水戸学につながっていく訳ですけれども、それに対して『古事記』こそが大切なんだと、そのように言い切った本居宣長の決断、見識は、いまから見ても真に驚くべきものがあったと思えます。

私は大学で『古事記』の講義を役割上担当させられておりますが(笑)、よくもこんな書物が八世紀の日本に誕生したものだ、毎回新鮮な驚きをもって、学生たちとともに講読しております。『日本書紀』は、やっぱり中国を意識した、中国の古典にも整合するような書物だと思います。ところが、『古事記』というものはそういう枠がなくて、むしろポストモダンの世界を展望しているような新しさがあるのではないかと感じます。

『古事記』を抛りどころにして、日本の国のあり方、人としての生き方を考えた国学者たちの学問・生き方というものを手掛かりにしなが、これからも国学の営みを自分なりに継承して参りたいと、分不相応にも念じている次第です。

上田 「新国学」なんていう言葉を使った人もいる訳ですが、国学の精神というのは古典時代から「記紀万葉」と普通に呼んだ古典を言う訳ですが、そこに展開された精神を検証し、提唱し、展開していく学問なんだというような考え方を

して良いのかどうか、皆さんどうですか。自分はそういう学問をしているのではないという。「新国学」というような言い方をいつ頃からし出したか、文学のそれか。

安蘇谷 一番はじめは、折口さんの先生である三矢重松さんが「新国学」と言ったように思います。

上田 「新国学」などと言う必要があるのか、それとも国学は「国学」で良いのか。そういう事を言われると困りますか？国学で良いんだという決心があれば、私はそれが一番良いと思うんですけど。時代に合わせるために言葉の上っ面だけ変えるというのは、私は個人的には趣味はない、何か新しい事を言ったような感じにゴマカされてしまうという。それは学問の継承のために國學院は國學院となった訳だし、皇學館の場合は官立で皇学をやるんだという事を宣言した大学だから、その國學院で国学という言葉について、ちゃんとした現代的認識を持って、他者に向かってその伝統を誇りとして語る人が、出来るだけ多く育つ事が大学の願いだと思うのですけど。そんな風には私はどうもなれませんという人が居られるのか(笑)、いや、それに全く賛成であるとおっしゃるのか。

安蘇谷 「新国学」という言葉は、いま言ったように三矢さんとか、それから戦後は柳田国男とか言っていました。歴史的には重要な背景があつて提唱されたと思いますし、近世の

国学とは研究方法が異なるのだという強い意識があつて、「新」という言葉を付け加えた事にまちがいないでしょう。

私はあえてもう「国学」でいいのではないか、そして日本人の心というか、日本人の生き方、日本の文化、日本文明でもいいと思うのですけど、そういうものを大切にしていって、それが日本人にとって一番幸せな生き方のスタイルであるというものを見出だすのが国学である。というふうにつまれば、もう私は「新々国学」とか「新国学」とか言う必要はなくて、方法が違つていいと、そんな感じで捉えてますけど。もう「国学」で一貫したほうがよいのではないのでしょうか。

上田 明治の変革が非常に大きくて、特に西洋という巨大な力との対決の前で、江戸時代までのあり方とは違う姿勢を持たなければならぬという事で、「新国学」という言い方をしたのだと思いますけれども。

司会があまりうまく捌けずに、言い足りない事が一杯あられたのだと思うのですが、これだけ人数がいますと、二時間で一人一人の人に十分語っていただくという訳にはゆかない。拙い司会で申し訳ございませんでした。本日はどうもありがとうございました。